慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地理学の理論に関するノート(1)
Sub Title	A note on geographical theory (1)
Author	高橋, 潤二郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.7 (1976. 10) ,p.574(74)- 580(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19761001-0074
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19761001-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

地理学の理論に関するノート (1)

高橋　潤二郎

1－1　地理学は，伝統的に，地表に関する科学であると規定されてきた。ここで，われわれが関心をもつのも地表である。

何故われわれは地表に関心をもつのか。いうまでもなく，それは，地表が人間をふくめてすべての生物の主要な生活の舞台であるからであるが，それ以上に，地表が場所によってことなり，時間の経過とともに変化しているからに他ならない。地表が完全に一様であったならば，おそらく地理学という学問はうまれなかったにちがいない。この意味で「相違」という概念は，地理学において，基本的なものである。と同時に，この地表にみられる相違は時間の経過とともに変化する。かつては，ことなった特徴をもっていた場所が同じような性格をもつようになり，逆に，同じ性格をもっていた場所がことなった特徴をもつようになる。もし，このような変化がなかったら，地理学者の仕事ははるかに容易に，だが，単調なものになっていたにちがいない。この意味で，「変化」は，相違とならんで，地理学における基本的概念だといわねばなるまい。

相違と変化，これら一見ことなっているようにみえる二つの概念は，実は，密接に関連している。何故ならば，より一般的な変違 variation という概念が存在しており，相違も変化も単に，この概念のことなった側面をさしているともいえるからである。すなわち相違は空間的変違を，変化は時間的変違をさしていると考えることもできる。

周知のように，カントは地理学を空間学，歴史学を時間学と規定した。その伝統をうけついで，地理学者の中には，地理学をもっぱら前述した変違のうち，空間的変違のみを取扱うと考えるものもいないわけではない。だが，もし，地理学の研究対象が地表であるとしたならば，この考え方は，あきらかに片手落ちである。何故ならば，地表は空間的存在であるとともに時間的存在であり，したがって，地表を研究対象とするかぎり，われわれは，これら変違の二つの側面にともに重大な関心をはらわざるを得ないからである。

地表は場所によってことなり，そのことなりかたは時間の経過とともに変化する。この地表のもつ特性が地理学をきわめて興趣ある永遠の課題にしているのである。

1－2　地表は「相違」と「変化」にみちている。これが，われわれの地表を研究対象としてとりあげる第一の理由である。だが，こういっただけでは十分ではない。われわれが研究対象として地表をとりあげるのは，それが単に相違と変化にみちているからだけでなく，ある種の秩序をもっている。すなわち，この相違と変化の仕方が全くでたらめではなく，ある種の規則にしたがっていると考えているからである。

他の科学がそうであるように，地理学者もまたつねにある種の規則ないし規則性を見出すことに関心をもってきた。この事実は，しばしば，地理学者が地表上の相違と変化に着目する結果，いわゆる全称的すなわち地表上いたるところにあてはまる命題よりもある特定地域にのみ成立する特称命題に関心をもってきたことによって，かくされがちであった。しかし，たとえ特称命題，極端な場合にはある個体に関してのみ成立する単称命題に関心をもった場合でも，われわれは，何らかの規則性，少なくとも一定期間にわたって持続する不変の特性に言及していることに気づくべきであろう。規則性の探究は科学としての地理学にとって本質的なものである。何故ならば，規則性，特に確定的な規則性は事象の再現性と切りはなしがたく結びついており，かつ，この再現性は予測の可能性と結びつくことによって，われわれの環境に対するよりよい適応を可能にするからである。

もちろん，この規則性の発見は決して容易なものではない。ホスパーズが言っているように，もし，われわれが自分たちの経験の中で規則性ではなく，不規則性の発見に興味をもっていたとしたならば，仕事ははるかにたやすくなるだろう。

「岩石には硬いものも柔いものも，重いものも軽いものもある。ある雨は助けになるがある雨は破壊をもたらす。ある人は丈が高くある人は低い。もし，一切の経験がこんな状態なら，われわれはつぎに何を予想したらよいかわからなくなるだろう。」〔1〕

たしかに，地表は場所によって相違し，時の経過とともに変化する。しかし，われわれの地表に関する記述がこのようなものであり，それに終止していたならば，それは，われわれの意志決定にとって何ら有効な情報をもたらさないにちがいない。

この意味で，地理学者が地表上にみられる相違と変化に関心をもつという言い方は，少々誤解を招きやすい。われわれは，むしろこれら地表上の相違と変化の中に見出される規則性，いいかえれば，変遷の中の不変性に関心をもっているのである。

これから，われわれが扱おうとしているのはまさにこのテーマに他ならない。だが，その前に，あらかじめいくつかのことわり書きをしておくことが望ましい。何故ならば，われわれは，この伝統的な問題を，従来とはいささかことなった視点からとりあげ，ことなった仕方で取扱おうとしているからである。われわれは，ここでわれわれの視点とアプローチが全くユニークなものだと主張するつもりはない(ことに学問に関するかぎり，全くユニークであることなど滅多にあるものではない)。だが，それはそれとして，われわれの視点とアプローチは明確にされねばならない。

まず二つの点が明確にされる必要があろう。それは，われわれが地表の変遷に関する規則性に関する普遍・抽象的命題に関心をもっていること，および，これら諸命題をもっぱら推論によって導出し，論証によって正当化しようとしていることである。

1－3 われわれの地表に関する記述は通常個別・具体的言明か普遍・抽象的言明のいずれか一つの形式をもっている。個別・具体的言明とは，単一の事物・事象に関する言明であり，その主語が固有名詞か指示代名詞であること，或いは，副詞として一定の具体的な時と場所に関する指定をともなうことに，その特徴がある。これに対して，普遍・抽象的言明は，事物ないし事象の集合に関する言明であり，その主語がもっぱら普通名詞からなる言明である。日常生活において，これら二つの形式はともに重要にある。われわれは，一方において人間一般について語るとともに，他方，ジャレットやコートレンについても語る。たしかに，普通名詞がなかったならば，われわれの会話はほとんどなりたたないに相違ない。だが，固有名詞がなかったら，人類文化とその歴史に関するわれわれの記述は，はるかに貧弱なものになっていたことだろう。

このことは，地理学についてもあてはまる。われわれは，一方において，ミシシピー川やオビ川に関する個別・具体的な事実に興味をもつとともに，他方，流速と流量に関するレオポルド-マドックの法則に関心をもつし，フィラデルフィアや京都に関する記述とともに，人口密度が都心からの距離に比例して指数関数的に減少するというコーリン・クラークの法則についても関心をもっている。われわれの経験的知識にとって，これら二つのタイプの情報がともに重要であることは否定できない。

しかし，それにも拘らず，本稿において，われわれは，これら二つの言明形式のうち，もっぱら普遍・抽象的言明にかかわりあうことになるだろう。これは，従来，地理学の研究者がともすれば，個別・具体的言明に関心をもってきたのと対照的である。何故，われわれは，経験的知識にとってともに重要な二つの言明形式のうち，特に一方を重視するのか，それはわれわれがながくつちかわれてきた科学的伝統に忠実であろうとするからに他ならない。科学者は，つねにこれら二つの情報のうち，普遍・抽象的言明に焦点をおいて彼らの仕事をすすめてきたし，今後もおそらくそうだろう。

科学者は個々の事物や事象にてらしてのみ真であり得るような言明にはほとんど関心をはらわない。彼らが関心をもつのは，つねに多数の事物と事象に即して，その真偽が問われる言明，すなわち普遍・抽象的命題の探究である。

もちろん，このことは，われわれが地表の個別・具体的事実（個人の直接的経験はすべて個別・具体的なものである）を全く無視することを意味しているわけではない。ただわれわれは，他の科学者がそうであるように，これら個別・具体的な事実の記述を＜最終生産物＞だと考えていない。むしろ，それを普遍・抽象的命題を得るための素材だと考えているのである。本稿において，われわれの関心は，あくまでも地表の特性である

「変遷」の規則性に関する普遍・抽象的命題の導出にあり，それにとどまっている。

1－4　地表に関するわれわれの言明は，これらいずれの形式をとるにせよ，われわれ自身のイメージを記号化したものである。たとえ同一の事物を対象にしても，個人のイメージは，それぞれことなっている。したがって，地表に関するいかなる記述も一つの仮説にすぎない。いかにわれわれが自分自身の仮説が正しいと主張しても，仮説が一定の規準をみたしていないかぎり，人びとはこれを承認しようとはしないであろう。仮説が個人から多数の人びとのものになる規準は，いくつか考えられるが，その中で，科学者は伝統的にいわゆる真偽の規準といわれるものを重視してきた。科学者にとって，真である言明のみが価値があり，真でない言明は，それがいかに美しく，感動的なものであろうとも無価値である。一般に，一定の方法ないし手つづきによって，その真偽を検証することのできる言明を命題と呼ぶが，この命題の検証にあたって，科学者はこれまた伝統的に二つの方法に依拠してきた。すなわち，経験的妥当性による験証と論理的斉合性にもとづく論証である。前者の手つづきによって正当化された普遍・抽象的命題を経験的法則，後者によって真であることがたしかめられた命題を論理的法則，或いは定理と呼ぶならば，科学者の基本的目的は，自己の仮説をこれら法則ないし定理の形で提出することだといえよう。

験証と論証という二つの手つづきは，科学的知識という建造物を支える二つの礎石である。科学もまた芸術と同じように，人間の想像力の所産である。したがって，その根底にあるものは，あるときは放じゅうとさえ言える程自由な発想である。だが，発想のおもむくままに仮説をつくるわけにはいかない。仮説が人びとによって承認されるためには，験証と論証という手つづきによってしっかりと防禦されていなければならないのである。

いうまでもなく，地理学は経験科学である。したがって，これら二つの手つづきのうち，験証を欠くことはできない。だが，地理学者はこれまであまりにも験証という手段にたよりすぎていたのではあるまいか。論証による自己の言明の正当化，しかも，純粋な形でこれを試みることによって，われわれの眼前に従来とはことなった未知の世界がひらけてくるのではあるまいか。科学における論証の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。事実，近代科学の発展，その中でも先導的役割を果した物理学の発展は，この論証の手つづきを重視することによって，達成されたともいえよう。

科学的知識の発展における論証と験証は，いわば車の両輪のようなものである。そのいずれが欠けても，車体は傾いてしまう。地理学は，これまであまりにも験証を重視してきた結果，片方の車輪が肥大してしまい，先へ進むことが著しく困難になっている。本稿において，われわれがもっぱら論証を重視しようとするのは，このために他ならない。いわば，それは，もう一つの車輪を大きくすることによって，科学としての地理学のバランスを回復しようとする試みだともいえよう。

験証ではなく，論証を重視する。いうまでもなく，このことは，われわれが命題の正当性をもっぱら，経験的妥当性ではなく，論理的斉合性によって主張するということである。したがって，これから展開される議論において，われわれがまず重視するのは，論理的無矛盾性であって，経験的妥当性については第二次的な関心しかはらわない。

この点，われわれにとって参考になるのは，幾何学者の経験であろう。幾何学，この地理学と最も関係の深い数学の一部門は，ながい間経験科学の一分野とみなされてきた。したがって，験証は幾何学にとって不可欠の正当化の手段であった。だが，現代幾何学において，験証はかつての重要性をほとんどもっていない。というのは，現在幾何学者の多くは，彼らが現実の空間を取扱っているのではなく，むしろ現実を一部としてふくむより広範な空間，いわば論理的に可能な空間を研究対象としていることをはっきりと自覚しているからである。

われわれの立場も，これと全く同じであって，ここでわれわれが第一義的に関心をもっているのは，時間－空間的変遷の規則性に関する相互に矛盾することのない一連の諸命題の導出である。この意味で，われわれは，これから取扱おうとする変遷に関する規則性のすべてが現実の地表に見出されないという批判をうけたとしても，あまり気にかけないだろう。何故ならば，そうした批判は，本質的に見当ちがいなものにすぎないからである。

もちろん，ここで提出されるいくつかの定理は，験証の対象となるし，また最終的に験証されねばならない。だが，すべての定理が験証可能であるわけではな

い。というのは，ここで，われわれは，現実の地表にみられる変遷そのものではなく，むしろ，これら現実の変遷をその一部としてふくむより広範な時間—空間的変遷に関する規則性に関心をもっているからである。

要するに，われわれが，ここで関心をもっているのは，地表の基本的特性である時間・空間的変遷に関する規則性である。そして，この規則性について，いくつかの定理を発見し，これら諸定理をふくむ概念的枠組を提示すること，すなわち，地理学の理論をかたちづくることが本稿の目的である。

1－6　従来，地理学において理論的探究が成果をあげなかったことについては，これまでにも，さまざまな議論がなされてきた。本稿の目的は，地理学の哲学や方法論について述べることにはないので，これら議論について詳述するつもりはない。ただ，一つだけ指摘しておかねばならないことは，地理学における理論の未発達の原因は，これまでしばしば主張されてきたように，われわれの研究対象に求められるべきではなく，むしろ研究者の側に求められるべきことであろう。

すなわち，ほとんどの地理学者が「理論」の意味や存在意義について，あまりにも無知であり，しかも理論のつくり方について全く不案内であったことが地理学において理論の発達しなかった最大の理由なのである。

理論という知的建造物をこしらえるためには，通常の建築がそうであるように，それにふさわしい用具と技術を必要とする。しかも，この用具と技術は，経験的研究においてもちいられるそれと同じではない。この点，特に強調されなければならないのは，理論をかたちづくるためには，経験的研究とはことなった問題提起の仕方を必要とし，しかも，この問題は経験的研究におけるよりも，はるかに抽象的な諸概念をもちいて述べられていなければならないということである。

従来，多くの地理学者は「地表にはいかなる秩序(規則性)があるか」というかたちで，その問題を提起してきた。観察を重視し，もっぱら験証に依拠する地理学者にとって，これはある意味で当然であろう。というよりも，このようなかたちで問題提起をするかぎり，われわれは必然的にそうせざるを得ない。いいかえれば，この問題提起の仕方は，本質的に「経験法則」指向であって，いわゆる帰納的アプローチと結びついたものなのである。

しかし，かつてなされた理論的成果を考察してみると，多くの理論的問題は，このようなかたちで提出されていない。すなわち，もし，われわれが理論に関心をもつならば，その場合，問題提起は次のようになされねばならない。

「地表が一定の規則にしたがって生成されるものと仮定しよう。そのとき，地表はいかる形をとるか」

この問題提起が，同じ地表の規則性を扱いながら，前述のそれと全くことなっていることはあきらかであろう。前者が観察を重視するのに対し，後者は思考を重視する。事実このようなかたちで問題が提起されるかぎり，観察の入りこむ余地はほとんどない。あるのは，一定の前提条件（規則）の明示と，その前提条件のもとに導出される結論（いかなる形）およびその導出過程のみであり，これらは，そのほとんどが観察というよりは，入念な思考の産物なのである。

本稿で，われわれが取扱おうとしているのは，前者ではなく，後者の問題である。すなわち，われわれがここで関心をもっているのは，現実の地表に見出される規則性ではなく，むしろ一定の規則にしたがう地表，より直截な表現をもちいれば「完全な秩序をもつ地表」とはいかなる存在かを問うているのである。

ここで，「完全な秩序をもつ地表」という表現は，やや奇異な感じをあたえるかも知れない。いうまでもなく，それは，地表という概念の抽象度が低い，すなわち，このような問題提起の構成要素としてもちいられる程，十分に抽象化されていないからに他ならない。

たとえば，地表の代りに「時間—空間的変遷」或いは，全く同じことだが「配置」という概念を導入し，「完全な秩序をもつ配置」とは何かと表現すれば，問題はより明確な意味をもち，より納得しやすいものとなろう。すなわち，理論的問題は，経験的問題に比べ単に問題提起の仕方がことなるばかりでなく，はるかに抽象的な諸概念から構成されていなければならないのである。

周知のように，クリスターラーの基本的問題は，「都市の規模，数および分布を規定する法則は存在するか」であった。だが，もし彼が「都市」という概念に固執していたならば，有名な「中心地理論」は生まれなかった，少なくとも，その確率はきわめて低かったと思われる。クリスターラーが「都市」の代りに，より抽象的な「中心地」という概念を設定し，その規模，数，分布に関する法則を求めたとき，彼は，現実の経験的問題を理論的問題におきかえたのであった。幾何学における「点」，物理学における「素粒子」，心理学

における「動機」や「態度」，さらに経済学における「限界効用」など，諸科学でもちいられている基本的概念は，こうした経験的には，観察し得ないことがあきらかな概念でみちているといえよう。

1－7　この抽象的概念の採用は，いわゆる演繹的アプローチ，すなわち，問題を主として推論によって解決しようとし，自己の言明をもっぱら論証によって正当化しようとする試みと，本質的なかたちでかかわりあっている。推論や論証は，たとえ，いかに単純なものであろうとも，一定の論理的諸規則にしたがっている。これら，論証ないし推論をする上で前提となる諸規則（通常カリキュラスと呼ばれる）は，一般に厳格性と普遍性を要求されるため，高度に形式化され，抽象化されている。したがって，有効な推論や論証を試みようとするかぎり，われわれは，少なくともこれら諸規則が述べられているレベルまで，現実の諸事象や関係を抽象化しなければならないのである。

たとえ，いかに単純なものであろうとも，理論をつくりだすためには，理論がそれに依拠するカリキュラスの存在が前提となる。理論的発展という視点からみた場合，地理学の最大の問題は，実はここにある。すなわち，多くの地理学者がこの論理的諸規則，その中でもとりわけ強力な数学に通暁していないことに求められるのである。もちろん，このことは，地理学の論文が非論理的であるとか，数学を利用していないということを意味しているわけではない。むしろ，現状では，数学は過大な程利用されているといえよう。だが，これら数学の導入は，そのほとんどがトリビアルな形でしかなされておらず，そうでない場合にも，地理学者のゆたかな発想をとじこめる強搾衣の役割しか果していない。いいかえれば，地理学者はいまだく自己のカリキュラス〉を発見していないのである。そして，いうまでもなく，その理由は，地理学者が自己の問題を理論的探究にふさわしい形で定式化しなかったことに求められる。

1－8　この理論的問題の定式化に当って，何よりもまず，はっきりとさせておかねばならないことは，地表がさまざまな事物・事象の組合わせからなりたっていること，したがって，地表の変違に関するいかなる言明も，実は，これら事物・事象の配置に関する言明に他ならないことである。それが変化，相違いずれのかたちをとるにせよ，われわれが地表上に何らかの変違を見出すためには，われわれは，少なくとも二つのことなった時点，ないし地点における観察結果を入手していなければならない。変化とか相違は，これら二つの観察結果を比較して，両者が「等しくない」とき，そのときにのみもちいられる概念であろう。他方，これまで多くの地理学者が指摘してきたように，地表はけっして単なる空虚な空間ではなく，さまざまな事物・事象によって「充塡」された空間である。いま，これら地表上に位置を占める事物・事象を一定の空間を占有する意味で「占有体」と総称するならば，地表は，これら占有体の集まりからなっていると考えることができるであろう。いうまでもなく，個々の占有体は一定時点において，一定の空間を占拠し，そのことを通じて，その地点の特色をかたちづくっている。したがって，地表上における任意の二地点における観察結果が等しくないということは，実は，それぞれの地点がことなった占有体によって占拠されていることを意味するに他ならない。いいかえれば，地表上における変違の研究は，地表上に存在，生起するさまざまな事物・事象の空間的組合せ，すなわち占有体の配置に関する研究と同義である。さきほど，「完全な秩序をもつ地表」を「完全な秩序をもつ配置」といいかえたのは，まさにこの意味に他ならない。

たしかに，地表は相違と変化にみちている。たとえ，きわめてせまい範囲をとったとしても，そこには，実にさまざまな事物と事象が存在，生起しており，われわれは，その多様性に圧倒されざるを得ない。だが，ここで指摘すべきは，現実にみいだされる事物・事象の組合せがいかに多様であろうとも，それは論理的に可能な組合せのうちのごく一部にすぎないということである。いいかえれば，われわれの見ている地表は，その生起が全くランダムであれば，生じたかも知れない組合せのおそらくほんの一部を示す展示場にしかすぎないのである。この意味で，われわれの研究対象である地表（より正確には，地表をかたちづくっている占有体とその組合せ）は，きわめてきびしく制約されているのであり，われわれが認識する変違は，本来この制約条件のもとに限定されている。すなわち，一定範囲内における相違であり，変化にすぎないといえるのである。

われわれがもし地表に見出される変違に関する規則性に関心をもっているならば，われわれは，必然的にこの拘束条件に言及しなければならない。何故ならば，われわれが通常「秩序」ないし「規則性」と呼んでいる特性は，実はこの拘束の存在によってもたらされた

ものに他ならないからである。

1－9　秩序と拘束，この一見何の関係もないように思われる二つの概念が，実は密接に関連していることを誰よりも明晰に示したのは，アシュビーであろう。すなわち，彼は，任意の集合の要素の数ないし2を底とするその対数を多様度と定義した上で，拘束(Constraint)がこの多様度の減少によってもたらされること，そして，あらゆる自然法則はこの拘束に関する言明に他ならず，したがって，「科学は拘束を探しだすことに関心をもつ」と主張したのである。〔2〕

このことをあきらかにするために，ここで図1のような線分の配列を考えてみよう。われわれは，この配列に何らかの秩序を見出すことができるであろうか。ほとんどの人びとはこれに対して否定的な態度をとるであろう。しかし，図2についてはどうか，われわれは容易にある種の秩序の存在を指摘することができる。

いうまでもなく，それは，図2について「任意の線分はその左隣の線分よりも低くなければならない」という拘束が存在しているからであり，かつ，この拘束の存在を配列パターンの中に容易に認知できるからに他ならない。

もちろん，この他にもさまざまな拘束が考えられる。たとえば図3 a，bのような配列にも，われわれはある種の秩序を見出すことができる。だが，図3－cではどうか，たしかに，ここには両端の線分が他の線分よりも高いという特徴が見出される。だが果して，これを秩序と呼び得るかどうか，疑問に思わざるを得ないであろう。いうまでもなく，この疑問は正当なものである。というのは，われわれが秩序と呼ぶ特性は，少なくとも相等のパターンが二度出現する。いいかえれば，事象の再現性と密接に結びついているからである。図3－cのパターンが，ある種の拘束の結果あらわれたものであることはいうまでもない。だが，われわれが秩序を見出すためには，単に制約が存在するだけでは十分ではない。この制約条件がある時間的・空間的範囲にわたって一定でなければならないのである(拘束条件は相等のパターンが少なくとも二度出現する期間ないし区域にわたって一定でなければならない)。

ここでパターンのくりかえしが必ずしも正確に等しい状態の再現性を意味しないことに注意しよう。われわれが秩序を見出すためには，正確に相等の状態がくりかえされる必要はない。相等のパターンがくりかえされるだけで十分なのである。

パターンという概念は，通常二つの意味にもちいられている。一つは，われわれが現実に観察したり，想像したりする個々の事物・事象の配置のありかたであり，もう一つは，これら個々の配置ではなく，むしろ，これら個々の配置をふくむ類型としてのそれである。いま，前者を「相」，後者を「型」と呼ぶならば，秩序が見出されるためには，決して等しい相がくりかえされる必要はない。等しい型が

図1

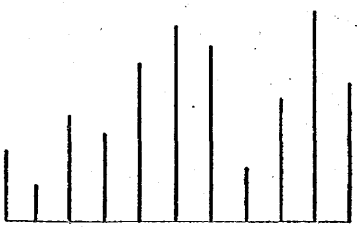


図2

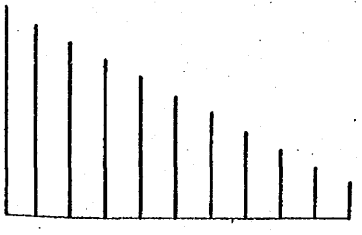
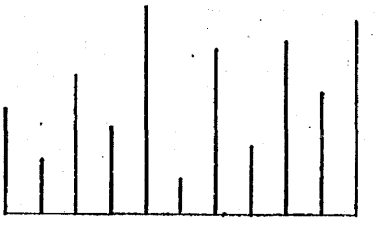
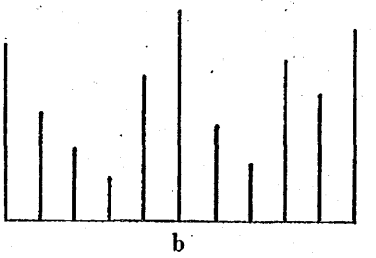


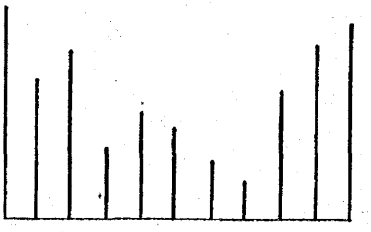
図3



a



b



c

くりかえされればよいのである。

と同時に，強調されるべきは，ここで，われわれが問題にしている秩序が純粋に配置にのみ関係していることであろう。対象となった個々の線分の長さはすべての図において相等しい。ただちがうのは配列の仕方である。いいかえれば，棒の順序が変わるだけで秩序があらわれたり，きえたりする。すなわち，配列の仕方に関する制約条件が秩序を生みだしているのである。

この秩序は，線分が現実に何であるかを全く問わない。線分の代りにチョーク，積木，或いは人間をもってきても，同じように成立する。すなわち，対象がいかなる存在であろうとも，前述の条件が成立しているかぎり，秩序はあらわれるに相違ない。すなわち，われわれの扱っている秩序は，自然・社会科学のいずれを問わず，他の分野の法則に依拠しているわけではない。われわれは，独自の法則，いわば配置の法則ともいうべきものを取扱っているのである。

地理学の理論は，それが存在するならば，まさしく，このような性格をもつものとなるだろう。地理学の理論は，他の学問分野の諸法則に依存するのではなく，それ独自の根拠をもっているのであり，本報告の目的の一つは，それをあきらかにすることにあるといえよう。

〔参考文献〕

〔1〕 John, Hospers; An Introduction to Philosophical Analysis, 斉藤哲郎監訳「分析哲学入門　3科学哲学」法政大学出版局　1971年。

〔2〕 William Ross Ashby; An Introduction to Cybernetics, 篠崎武 他訳「サイバネティクス入門」宇野書店　1967年。

（経済学部教授）